キーワードは〝ふれあいトークタウン〟

トークタウン
東九日町商店街振興組合
（昭和63年3月設立。会員数74店）

こげ茶色に統一された街路灯やベンチ。美しいアクセントを添える緑の木々。湯の町をイメージした、温泉の流れ出すモニュメント。そして、電柱のない幅広い歩道。「なんだか、違う町に来たみたい。スッキリして、とてもきれいになりましたね。」ここを歩く人は、そう口を揃える。八吉市東九日町商店街。電線の地中化をはじめ、歩道をモノトーン調のカラータイルで舗装するなどして、今年三月に面目を一新したばかりだ。

近年、全国各地で盛んに行われている電線地中化事業は、国や自治体、電力会社などが主体となって進められるケースがほとんど。こうした中にあって同地区は全国初の地元負担によるケースとして注目を集めている。この活動の中心的存在となっているのが、東九日町商店街振興組合専務理事の坂口慶典さん（49才）だ。

坂口慶典さん

「県が行う街路整備事業と合わせて、アーケードの建設などのようなありふれたものとは違った街づくりはできないか。こうした中から出て来たのが、電線の地中化の話でした。何せ、先例がないということで関係機関の姿勢は慎重だったのですが、粘り強い交渉が実って実現にこぎつけることができたんです。」

今回の整備工事では、カラータイルによる歩道舗装、ベンチ、バスシェルター等のストリートファニチャーを、独自の設計で設置した。

「街自体が目立つのじゃなくて、そこを歩く人、ショッピングする人が主役。人々が集まり、立ち話をしたり街路樹の陰で休んだり建物をながめたりする。そんな〝みんなの広場〟のような街並みが作れたらと思ったんです。」

ホーム

九日町一帯は、文禄三年（一五九四）相良藩の都市計画によって生まれた伝統ある商人町。現在でもホテルやショッピングビルが並ぶ八吉市のメインストリートだが、郊外大型店の進出などで客足は減少傾向にある。

「このままじゃいかん、という思いが商店街全体にあったんです。みんなこの街で生まれ、育った者ばかり。街に対する愛着の強さは全員に共通しています。毎晩のように仲間の家に集まって、不満や問題点をぶつけ合い、本気で議論し合ったんです。奇想天外な発想でみんなをあっと言わせる者。ソロバン勘定に優れた者。タイプの違う者がいろいろいたのがよい刺激になったのでしょう。話し合いを重ねていくうちにグループ内の雰囲気がどんどん変わっていきました。全員が一つの目標に向けて進んでいこうという一体感が生まれたんです。ハードな毎日だったけど、こうした体験をすることで、初めて街づくりが分かりかけてきたという感じがしましたね。今までなんとなく頭の中だけで理解したつもりになっていた事柄が、やっと自分達の身についてきたんじゃないかな。」

街が新しくなって二ヶ月。町の愛称も二百余りの応募案の中から、「ふれあいトークタウン」に決定した。同地区に刺激されて、市内の他の商店街でも再開発計画が持ち上るなど、波及効果は大きい。

「これでわが街づくりが終了したとは思っていません。むしろ、やっとスタートラインに立ったばかりかもしれない。今、この街は実にいいムードですよ。この魅力的な〝器〟の中に、どんな楽しさを盛り込んでいくか。各店舗にイスやテーブルを設け、お客様にお茶のサービスを行ったり、メインストリートや球磨川を利用してイベントを開催したり……。今、いろんなプランを温めているところです。街や通りはここを訪れる人のものであり、ここに住む人のもの。心と心のふれあうような街にしていきたいんです。」

今年暮れ高速自動車道開通に向けて、大きく変貌しつつある八吉市。東九日町商店街は、その核となる存在かもしれない。